

若い力で震災伝承

学び・発信「風化」防ぐ



伝える／備える

311 次世代塾

東日本大震災の伝承と防災発災の担い手育成を目指し、河北新報社などが企画した通年講座「311『伝える／備える』次世代塾」が15日開講した。受講登録した大学生と社会人116人のうち101人が開講式に参加。「震災で起きたことを学び、教訓を他地域や

次の世代につなげたい」と決意を新たにしたい。受講生は想定した定員30人の約4倍に上り、山形や東京など宮城県外からも11人が参加。「被災の現実に向き合いたい」「現場の声を傾けたい」と意欲的な声が続出した。主催する「311次世代

塾推進協議会」会長の一力雅彦河北新報社社長は、開講式で「皆さんは次世代塾の記念すべき1期生。震災に深く向き合い、学んだ防災の知恵を全国各地に伝えてほしい」と激励し

た。式後にはグループワークもあり、震災から連想するキーワードを出し合って意見交換。討議を踏まえ「あの日の教訓を自分の言葉で伝えられるようにしたい」「風化を防ぐため、学んだことを積極的に発信した

い」と班ごとに誓いの言葉を述べた。講座は仙台市宮城野区の東北福祉大仙台駅東口キャンパスを主会場に、来年3月までに計15回実施。発災直後、復旧期、復興期の3段階に分けてテーマを設定し、津波被災地の視察も3回程度予定している。毎回、震災被災者や支援者の証言と訴えを聞いた後、1班10人前後のグループワークに臨む。講義の感想や意見を語り合い、対話を通して理解を深める。

を。後にはグループワークもあり、震災から連想するキーワードを出し合って意見交換。討議を踏まえ「あの日の教訓を自分の言葉で伝えられるようにしたい」「風化を防ぐため、学んだことを積極的に発信した

ことを学び、教訓を他地域や

ことを積極的に発信した



学生、社会人混成のグループで震災伝承の課題を語り合う受講生＝仙台市宮城野区の東北福祉大仙台駅東口キャンパス

メモ 311「伝える／備える」次世代塾は毎月第3土曜日を基本に開く。受講無料。311次世代塾推進協議会には、東北福祉大仙台駅東口キャンパスの活用で協定を結ぶ河北新報社、東北福祉大、仙台市の三者を核に、東北、宮城教育、東北学院、東北工業、宮城学院女子、尚絅学院の6大学と学都仙台コンソーシアム、日本損害保険協会、みちのく創生支援機構が協力・連携団体として参加する。連絡先は協議会事務局の河北新報社防災・教育室＝メールjisedai@po.kahoku.co.jp

震災を知る機会に

古里の宮城県女川町は津波で大きな被害を受けました。現実に向き合いつつ、自分の知らない「3・11」

後悔糧に向き合う

宮城県亘理町にある自宅に津波は来ませんでした。町内では大きな被害があったのに、支援に動けなかつたのに、

伝える人を目指す

出身地の山形市も揺れましたが、津波はテレビの中の出来事。震災と本気で向き合おうと受講しました。

災害対応学びたい

進路希望は故郷の町役場。今の自分では大災害が起きたら対応できないと考え、受講しました。塾では

現場の声を大切に

東北大学院で復興のまちづくりを研究し今春、石巻市職員になりました。震災発生時は出身地大阪にい

充実議論に手応え

東京生まれの東京育ちです。被災地を自分の目で見て肌で感じたいと考え、受講しました。初対面の同世

も知りたかった。被災してない同世代が塾の1年間でどう変わるのかも関心があります。(仙台市太白区・尚絅学院大4年・山川竜輝さん・21歳)

た後悔があります。塾では被災を乗り越えて今を生きる人たちの声に誠実に向き合いたいです。(宮城県亘理町・宮城学院女子大4年・渡辺聖佳さん・21歳)

被災した人、してない人どちらの声にも耳を澄ませ、震災を伝えられる一人を目指します。(仙台市青葉区・富塚雅史さん・東北管区行政評価局職員・23歳)

体験者の肉声から多くを感じ、学ぶことを心掛け、防災を自分の言葉で伝えられるように努めます。(山形県中山町・東北福祉大3年・佐東瑞希さん・20歳)

ました。初回から受講者仲間に被災の現実を聞き、現場の声が何より大事だと思いを新たにしました。(仙台市宮城野区・公務員・谷崎佑磨さん・26歳)

代と充実した議論ができて手応えを感じています。震災のことを東京でも伝えられるよう、しっかり学びます。(東京都・上智大3年・伊藤怜奈さん・20歳)